







# ニッケイ俳壇

(833)

富重久子 選

アチャババイ

東 抱水

○どの町も教会が見え天高し  
○カルナバル観光バスも来て居りぬ  
○サンバ踏むブラジルに古り覚えけり  
湖沿ひに走る新涼窓開けて  
異国にて俳句学べるホ旬の秋

○半世紀前移民してきた時、一番先に目に止まつたのが教会の尖塔であつて、これがこの国のカトリック教会だなど納得した。教会は街々に一つでなく、幾つも見られたが、仏教徒の我々には珍しくハイカラに見えた。

○この句は実に平坦で易しい俳句であるが、この句のとおり、都会でも町でも、小さい村でも必ず綺麗で明るい教会が目に映り、朝夕は静かな重々しい教会の鐘が鳴り心癒される。

○季語の「天高し」がまことによい選択。

○二句目、カルナバルの街々の情景を表して簡明な中にも大都と違った趣の、カルナバルの声聞気が伺える。「観光バスも来て居りぬ」とは悠揚迫らざる地方の、長閑なカルナバルの写生俳句であり、この作者らしい露草や宿志でありし牛を飼ふ

○遠山の斧のひびきに秋の声

○露草や宿志でありし牛を飼ふ

軒近く掲ぐモンショロに秋を聞く  
○「秋の声」は主觀的なもので、心に響く  
この句は、昔者が農事に携わっていた頃に開拓の斧の冴えた音から、計り知れない深い秋のしみじみとした想いが、囁く秋の声のように聞こえたと言う一句である。

斧入れて香におどろくや冬こだち  
頃に開拓の斧の冴えた音から、計り知れない深い秋のしみじみとした想いが、囁く秋の声のように聞こえたと言う一句である。

跳ね牛に露の投網狂ひなく  
軒近く掲ぐモンショロに秋を聞く  
○「秋の声」は主觀的なもので、心に響く  
この句は、昔者が農事に携わっていた頃に開拓の斧の冴えた音から、計り知れない深い秋のしみじみとした想いが、囁く秋の声のように聞こえたと言う一句である。

斧入れて香におどろくや冬こだち  
頃に開拓の斧の冴えた音から、計り知れない深い秋のしみじみとした想いが、囁く秋の声のように聞こえたと言う一句である。

慣れる、確かに「ブラジルは大変なことも  
あるが、「良い国」なのかも知れないと思  
う。他の句もさりと読み上げた季語の選択も良い句であった。

○レストランに「又来ましたよ」食の秋  
耳鳴りは老人の兆しか虫の音か  
何處までも続く畠や大豆熟れ

○「読じても楽しい俳句であった。最近始  
めた作者には自由に詠まれる様進めている  
が、こんな軽快に説まるとは吃驚してい  
る。レストランに入るなり「又来ました  
よ!」と声を掛ける作者の姿が見える様な  
佳句。

○「爽賴をかすかに耳にとめゆきて  
小説は終らぬ秋の雨やまず  
散り際の潔きこと乱れ萩  
雛祭三色おこし懐かしや

○「爽賴」(そうらい)は字の「そく爽や  
かな風の響きで、秋風の音も聞き漏  
らさず、心中で、嗚呼もう秋がやつて來  
たんだなあと、心に呴いている作者。「と  
めゆきて」とは床しい大和言葉。心を寄せ  
る耳集中させる意。この作者らしい  
佳句であった。

○娘に髪を刈って貰ひし残暑かな  
秋暑し女流弁舌なめらかに  
蘭抱き孫面映げに祝はるる  
○今年は残暑が長く酷かつたので、私も思  
いきつて断髪にしてしまった。何んといつ  
ても髪が首辺りで纏れているとやり切  
ない。

○娘さんに髪をきつて貰い、すつきりした  
作者である。「残暑は立秋過ぎても暑さ  
が残ることをいう「秋の季語」である。

○「色鳥」は色々な渡り鳥をいうが、特に  
宵のうちカルダス温泉まだ残暑  
新涼や紅茶に香るウイスキー  
○色鳥や木蔭に並ぶ菓子店  
家政権妻にゆづりて女性の日  
移民して母の花好き紅鸚鵡  
身内なき祖国も遠し初日の出







